

愛&ハート

■本部

- 信頼される法人運営を目指して

■愛の家

- ゴールした時が新たなスタート
- 地域生活を支える拠点としてのグループホームの役割
- 未来は現在の積み重ね

■あいハート須磨

- ショッピングツアーの再開
- 「その人らしい暮らし」を支えるために

■あいハート離宮前

- 春の外出ツアーを終えて

■脳梗塞リハビリステーション神戸須磨

- 第2回「脳リハ交流会」盛会のうちに終了

2026 July

283号

あいハート
離宮前入居者様
の作品



信頼される 法人運営を目指して

■事務局長 高岡 順二

新年度がスタートして4カ月が経ち、夏の深まりを感じる季節となりました。日頃より当法人を支えてくださる皆様に、心より御礼申し上げます。また、ご利用者様やご家族に寄り添いながら、各現場で専門性と熱意をもって取り組む職員の皆さんに深く感謝申し上げます。

さて、社会福祉法人には、高い公益性と透明性のある組織運営が求められています。その中核となるのが理事会や評議員会といった機関ですが、世間ではこれらが単に書類を通すだけの「形骸化した場」になっていることが問題視されるケースも少なくありません。私たちの法人では、社会から信頼される法人運営を行うため、そのガバナンス体制の充実に努めてまいりました。

当法人は、かつてはN・T・T労組の役員を中心とした体制で運営基盤を築いた時期もありましたが、現在は社会環境の変化や求められるガバナンス強化の要請を踏まえ、各分野の第一線で活躍する専門家を迎え、「外部の視点」と「高い専門性」を取り入れた体制へと発展しています。

現在の理事会は、理事長のもと、各施設長を中心に構成し、現場の状況や課題を迅速に経営判断へ反映できる体制としています。また、法人の健全性をチェックする2名の監事には、「社会福祉法人会計を専門とする会計事務所の代表者」、並びに「社会福祉法人の常務理事」を迎え、財務と運営の両面から厳格な監査を受けています。さらに、重要事項の議決機関である評議員会には、「社会福祉を専門とする大学教授」、「社会福祉法人の理事長・責任者」、「社会福祉協議会の事務局長」、「地域の民生委員」など、様々な立場の方々に参画いただき、客観的な視点で法人運営を支えていただいています。

こうした体制は、単に法律を遵守するためだけではありません。透明性の高い運営を行うことは、職員一人ひとりの適切な労働環境や専門性の発揮を支え、誰もが迷いなく日々の業務に打ち込める環境づくりにつながります。その結果として、利用者様へ質の高いケアを届けることができると思っています。

今後も健全で透明性の高い法人運営を継続し、職員が誇りをもって働ける法人、そして地域の皆様に信頼される法人運営を目指してまいります。

本格的に暑さが厳しくなる季節を迎えますが、皆様どうぞご自愛ください。



愛の家

ゴールした時が 新たなスタート

■かがやき(成人部)支援スタッフ

深澤 弘史

「まずは1年間、全力で走り抜けてみよう」そんな思いで、この施設の門を叩いたあの日から、早いもので1年が経ちました。

正直に言うと、私は新しいことに挑戦することが得意な方ではありません。変化に対して不安を感じることも多く、初めての業務に取り組む時には「本当はやりたくない」という後ろ向



きな気持ちになることもありました。そんな私が、この1年間を無事に走り抜けることができたのは、上司や先輩職員、支援員の温かい支えがあったからです。

右も左も分からず立ち止まっていた時、いつも皆様が優しく声をかけ、導いてくださいました。一人では乗り越えられなかったことも、周囲の方々の支えがあったからこそ経験を積み、成長することができました。心より感謝しています。

「1年間走り抜ける」という最初の目標を達成した今、私はこのゴールを終わりではなく、新たなスタートラインだと感じています。

二年目を迎えるにあたり、これまで以上に新しい仕事や経験に挑戦していきたいと思っています。苦手意識はまだありますが、「苦手だからこそ挑戦すること」「少しでも前に進むこと」が

自分自身の成長につながると感じています。

これからも前を向いて頑張りたいと思うのは、これまで支えてくださった皆様へ恩返しをしたいからです。そして、利用者様や職員と共に歩み、今度は私自身が誰かの支えになれる存在になりたいと思っています。



「苦手だけど、頑張りたい」という素直な気持ちを大切にしながら、一つひとつの経験を積み重ね、2年目はより頼られる職員へ成長していきたいと思っています。新たなスタートを迎えた私を、今後ともよろしく願っています。

地域生活を支える 拠点としての グループホームの役割

■グループホーム主任

山口 真吾

愛の家では、地域の中で20年にわたり障がい者グループホームの運営を続けてきました。利用者の皆さまが住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、ご家族や関係機関、地域の皆さまと協力しながら支援を行っています。

グループホームは生活の場であると同時に、地域生活を支え



る拠点でもあります。日々の暮らしを支援するだけでなく、就労先や医療機関、相談支援事業所などと連携しながら、一人ひとりの生活を支えています。

近年はグループホームへのニーズが高まっており、入居に関する相談も多く寄せられています。しかし、地域全体で見ると受け皿は十分とは言えない状況です。そのため愛の家では、地域の

ニーズに応えるため新たなホーム整備など事業拡大に向けた取り組みを進めています。また、地域で生活続けるためには、グループホームだけで支援が完結するわけではありません。地域の皆さまの理解や協力、関係機関との連携があつてこそ、安心して暮らしが実現します。愛の家でも地域連携推進会議の開催などを通じて、地域とのつながりを大切にしながら運営を行っています。

一方で、利用者の高齢化に加え、支援を担う世話人の高齢化も進んでいます。医療的な支援が必要となる利用者も増えており、これまで以上に医療機関や看護職との連携が重要になっていきます。また、人材確保や育成も大きな課題となっており、将来にわたって安定した支援を提供できる体制づくりが求められています。



これまで積み重ねてきた経験を大切にしながら、地域のニーズに応え、利用者の皆さまが安心して暮らし続けられる環境づくりに取り組んでいきたいと考えています。また、持続可能な事

業運営を目指し、地域に必要とされるグループホームであり続けられるようにしていきたいと思っています。

未来は現在の積み重ね

■事務スタッフ 北口 恵美子

先日、法令に基づくハラスメント研修を実施しました。職員が共通の理解と正しい知識を持つことが目的です。

ハラスメントは「相手が嫌だと感じる言動」であり、言った側の意図ではなく受け手側の感じ方が基準になります。厚生労働省の調査では、過去3年間にパワハラを受けた人が19.3%と最も多く、カスハラ10.8%、セクハラ6.3%と続きます。パワハラは「何度も繰り返し返された」という回答が32.0%あり、相談件数も増加していることからその深刻さがうかがえます。



研修では、ハラスメントが生じる背景として、知識不足や価値観の違い、コミュニケーション不足、ストレスなどがあり、悪意がなくても起こり得ることを確認しました。また、指導とハラスメントの違いとして、業務上の必要性、伝え方の適切さ、相手の尊厳を守れているかが重要であると学びました。さらに10問のクイズを通じて、同じ言動でも受け取り方が人によって異なることを実感しました。例えば「忙しい時期に残業をお願いした」という問いに、強要でなければ問題ないと考える人、言い方次第でハラスメントになると答

える人など、年代や経験による価値観の違いが表れていました。

最後に視聴した厚生労働省のパワハラ再現動画では、「見て見ぬふりもハラスメントにつながる」と示され、多くの参加者がその点に触れていました。しかし実際には、声をかけても相手が「大丈夫」と答えると踏み込みにくい場合や、相談窓口に話すことへの抵抗感、周囲に知られたくないという思いから問題が見えにくい現実があります。コミュニケーションは容易ではありませんが、無理のない範囲で気持ちを伝え合える関係を大切に



したいと思います。お互いを思いやり気遣うことはハラスメント防止につながり、一人一人が安心して働け、力を発揮できる職場づくりにも結びつきます。日々の小さな配慮と対話の積み重ねを大切にし、より良い職場環境につなげていきたいと思っています。

あいハート須磨

ショッピングツアーの再開

■副施設長兼特養部門長

仙波 剛

毎月第4木曜日に1階ロビー

にて「喫茶コーナー」を開店しています。特養ご入居者とデイサービスご利用者対象に気分転換を兼ねてコーヒー等を提供し、ひと時を過ごして頂いています。その中で、特養ご入居者から「近くでもいいので外に出たい」

「買い物できる所に行きたい」といった声を頂きました。そこで、その声にお応えして、6月16日（火）にショッピングツアーを企画しました。

今回の外出先は、あいハート須磨から徒歩圏内にあるマックスバリュです。買い物を楽しんで頂き、イトインコーナーでコーヒーなどを飲みながらひと



時を過ごし、気分転換につなげることを目的としました。

事前に担当職員が個別に参加希望をお聞きしたところ、9名の方から参加の意向があり、1名のご家族からも同行を希望され一緒に参加してくださいました。

当日は、梅雨時期にもかかわらず適度な風もあり外出には良い天候でした。出発前から久しぶりの外出でもあり、ソワソワ、ウキウキした表情をされていました。

マックスバリュに到着すると、皆さん思い思いのコーナーに行かれショッピングを楽しまれていました。「これ買おう」「懐



かしいな。まだ売ってるんや」「これも買っていないかな」等会話も弾み、中には買い物かごの中を見せ合う方々もいらっしゃいました。

イトインコーナーでは、購入したお菓子やコーヒーを味わいながらゆったりとしたひと時を過ごしていただきました。

普段は職員体制の都合もあり、外出の機会を十分に設けることが難しい状況ですが、今回の企画を通してご入居者の皆さまに喜んで頂けたことは、大きな励みとなりました。

今後も、楽しみや喜びを感じていただける機会づくりに取り組んでまいります。



「その人らしい暮らし」を支えるために

■居宅介護支援事業所スタッフ

大藤 孝子

私は、介護保険認定調査員と介護予防ケアマネジャーとして、ご利用者のご自宅を訪問する機会が多くあります。訪問を重ねる中で感じるのは、年齢を重ねても、その方が大切にしてきた価値観や生活スタイルは変わらないということ。身体機能の低下が見られても、「自分

で買い物に行きたい」「庭の手入れを続けたい」など、これまでの日常を大切にしたいという思いは変わりません。

認定調査では、身体状況や日常生活動作を確認します。しかし、調査項目だけでは見えてこない生活背景や人生の歩み、ご本人の思いに触れることも少なくありません。長年続けてきた習慣や家庭・地域での役割など、その方の生活全体を理解することの大切さを日々実感しています。

また、介護予防ケアマネジメントでは、ご本人の思いに寄り添った支援によって、意欲や活動性が大きく高まる場面があります。「できないこと」に目を向けるのではなく、「できること」や「続けたいこと」を大切にすることで、その方らしい生活の継続につながることを学んでいます。



一方で、高齢化や独居世帯の増加に伴い、ご本人だけでなくご家族も高齢であるケースが増えています。支援の形も複雑化していますが、ご本人やご家族の思いに耳を傾けながら、地域の皆さまが安心して暮らし続けられるよう支援していきたいと考えています。

あいハート離宮前

春の外出ツアーを終えて

■介護スタッフ 大倉 加奈

5月中旬から下旬にかけて春の外出ツアーとして離宮公園のバラ園へ出かけました。ゆった



りと楽しんでいただけるよう少人数ずつのグループに分かれて実施し、色とりどりの美しいバラが咲き誇る中、自然と皆様が笑顔を見せてくださいました。「昔はバラを育てていたのよ」「家族とよく花を見に出かけたわ」など、懐かしい思い出話にも花が咲き、外出には心を動かしてその方らしさを引き出す大きな力があることを改めて実感しました。

計画をする際には、天候や安

全面などさまざまなことを考慮する必要があります。しかし「きつと喜んでくださるだろうな」とご入居者様の笑顔を思い浮かべながら準備を進める時間は私達にとっても大きな喜びのひとつです。また、外出先で見られる何気ない表情や会話の中には、ご入居者様のこれまでの人生や大切にされてきた価値観が垣間見えることがあり、私達がより深くその方を理解し、日々のケアに活かしていくための大切な機会になっています。コロナ禍では外出ツアーをはじめ多くの行事が長期間制限されました。その時期を経験したからこそ、一緒に季節を感じながら外へ出かけられる何気ない日常のありがたさをより一層深く感じています。

私達介護士は、医師や看護師のように病気を治療することはできません。しかしその分、人と



人との関わりの中で心を癒し、その方の毎日に温もりや笑顔を添える「寄り添うプロ」でありたいと考えています。これからも「ここで過ごせてよかった」と感じていただけるよう、お一人おひとりの人生や価値観を大切にしながら、安心できる暮らしのお手伝いを続けてまいります。

ご支援をくださった方々

《4月》

後援会費

NTT労働組合 関西総支部 社会福祉推進委員会 様
NTT西日本 関西支店 社会福祉推進委員会 様

マッチングギフト

NTT西日本グループ 様

寄贈品

嶺岡 美見 様

(計4件)

《5月》

寄附金

NTT労働組合 退職者の会 京都支部協議会 様
佐野 容利子 様

寄贈品

福祉ネットワーク西須磨だんらん 様 (計3件)

第2回「脳リハ交流会」盛会のうちに終了

脳梗塞リハビリステーション神戸須磨 主任 小舟 裕也

当事者9名とご家族5名が5/24(日)に脳リハに集い、2回目となる脳リハ交流会を開催しました。開催日が近づくにつれ、リハビリ中に「楽しみにしています」と話してくださる方が多く、準備をする私たちも胸が高鳴りました。

当事者の方には2グループに分かれていただき、まずは、ご病気のプロフィールを含めて簡単に自己紹介をしていただきました。「まずは」、そして「簡単に」のはずでしたが…。普段は打ち明けられない悩みや不安、リハビリに通い良くなった身体や生活のことを次々に話され、気付けば自己紹介に留まらない盛り上がり。自然に打ち解け合えるのも当事者同士ならではの感覚を感じました。会場から、「もう1つのグループの方の話もぜひ聞いてみたい」と声が上がり、後半はグループを1つにし

ました。参加者全員がお一人おひとりの話に耳を傾けている姿が私の心に残っています。今回はセンター長のミニ講座も企画し、ハインとヘルドの実験やダイナミックタッチなど、内容は専門的ですが、これをおもしろ雑学として皆さんにお話ししました。

「装具を外せた方の話を聞いて私も頑張ろうと思いました(脳出血、50代女性)」、「気付いたら自分のことをずっと話していました(脳出血、60代女性)」など、参加してよかったという声を多数いただいた脳リハ交流会。当事者同士の新たな繋がりができたことを嬉しく思います。



この当事者会の模様はInstagramにリール投稿しています。

QRコード、またはフィードから「脳卒中当事者会」のサムネイル画像をタップして、ぜひ映像としてご覧ください。



「皆様の声」受付窓口

全電通近畿社会福祉事業団では、社会福祉法第82条の規定に基づき、利用者家族の皆様等から「苦情」やご意見に適切に対応するための体制をとっています。面接・電話・書面等どのような方法でも結構ですので、遠慮なく、お気軽にお申し出ください。

- 愛の家 072-494-0123
- あいハート須磨 078-737-2525
- あいハート離宮前 078-731-2130
- 法人本部 06-6458-5723

【発行】

社会福祉法人 全電通近畿社会福祉事業団

〒553-0003 大阪市福島区福島 3-1-73

TEL 06-6458-5723

Website <https://www.zendentu-kinki.jp>

Facebook <http://www.facebook.com/zendentukinki>

E-mail jigyodan@silver.ocn.ne.jp

【発行人】

理事長 橋本 寿樹

